

介護者の多様性を知ることが介護者にもたらす影響

—神経難病介護を事例に—

東京大学大学院／日本学術振興会 石島健太郎

1 目的

本報告の目的は、複数の支援者が存在することの、支援者の実践への影響を明らかにすることである。近年、支援者の個性や、それゆえに個々に異なる被支援者との関係性が、支援の場面において表出するニーズに影響すること、こうした差異を支援者が認識していることが注目されている（前田 2009; 三井 2011）。そこで本報告では、支援者の多様性が、彼（女）らによってどのように解釈され、その実践に影響しているのかを問う。以上は、寺本（2013）によって問題が指摘されている、特定の個人が方向付けする支援とは別の支援のあり方を探る端緒である。

2 方法

ALSという神経難病患者の在宅介護をおこなっているヘルパーへの聞き取り、および介護現場の観察をおこなった。症状の進行したALSの患者は24時間の介助・介護を必要で、おのずとこれにかかわるヘルパーの人数も多いという点、および、ALSは精神症候を伴わないために患者の要望が多様で、ヘルパーがなすべきことも一意に定まらないという点で対象は適格的である。聞き取りデータは逐語録化し、フィールドノートとともにコーディングをおこなって分析を進めた。

3 結果

他のヘルパー働きぶりを見聞きすると、ヘルパーは自身をこれに準拠させようとしていた。すなわち、自身がしていないことはやらなくてはいけないと認識される一方、自身が他のヘルパーよりも突出している場合には、これを抑制しようとするのである。これらは役割の拡大と縮小という逆の現象のようでありながら、ヘルパー間の差異を極小化させる点で一貫した取り組みである。このように均質化されたヘルパーは取替可能で、介護全体の持続性に資すると思われる。

一方、ヘルパーの多様性を認識していても、その差異を保存しているヘルパーもいた。その場合、こうした差異は患者の采配の結果としてヘルパーらの意味世界の中で認識されており、患者の意志という動機の語彙が、ヘルパー間の差異の極小化に対する抗力となっていた。

4 結論

ヘルパー間の差異の極小化は、ヘルパーがその個性を発揮することによって患者が表出できたはずのニーズを潜在化させてしまう可能性がある。一方で、ヘルパー間の差異を保存においては、ヘルパーによる患者の意志の忖度が、患者のニーズを固定的に捉える傾向につながる危惧がある。よって、この両極の間で、ヘルパーの多様性の均衡点を探る作業が必要になることが提起される。

文献

- 前田拓也, 2009, 『介助現場の社会学——身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』生活書院。
三井さよ, 2011, 「決定/介入の割り切れなさ——多摩地域における知的障害当事者への支援から」『現代社会学理論研究』5:3-15。
寺本晃久, 2013, 「介助者がしていること——知的障害のある人の自立生活を巡って」杉田俊介・瀬山紀子・渡邊琢編『障害者介助の現場から考える生活と労働——ささやかな「介助者学」のこころみ』明石書店, 93-121。